

## 『今昔物語集』のヤウナリとヤウアリ

近 藤 要 司

## 一 はじめに

前稿「『源氏物語』のヤウナリとヤウアリについて」で述べたように、ヤウナリが助動詞として成長してくるのは、中世末期以後だと考えられている。したがって、中古や中世前期のヤウナリは、形式名詞に断定辞がついた形式名詞述語文に過ぎないことになる。

形式名詞述語文については、新屋（一九八九）が指摘するように、現代語においては「形式名詞+だ」があたかも一つの助動詞のように働く場合がある。たとえば、「太郎は、また釣りに出かける気だ」を見ると、本来「太郎が／のまた釣りに出かける気」のように、気を修飾する連体修飾部の主語であるはずの「太郎」が主文の主語に昇格している。したがって、厳密に言えば、主語「太郎」と述語「気だ」という主述の関係にないものが主述関係を構成している、主語と述語は「ねじれの関係」にある。このような主語述語がねじれの関係にあるものが新屋（一九八九）の言う文末名詞文（注一）の典型であり、「くはずだ」「くわけだ」もこのような経緯を経た後助動詞になったのである。

前稿ではこのようなことを踏まえて『源氏物語』のヤウナリはどの程度、文末名詞文的な振る舞いをするのかと

いう点に重点を置いて、主に終止法に立つものについて調査を行った。その際ヤウナリ以外に目を引いたのは、「ヤウナリ／ナシ(以下ヤウアリ・ヤウナシの両者の合わせて「ヤウアリと呼ぶ。)」という構文であった。文末名詞文には、形式名詞十断定辞」以外にも「大勢やってくる感じがする」「雨が降ってくる気配がある」のように「形式名詞十する」「形式名詞十ある」という形式も見られる。このヤウアリもそのような文末名詞文の一つである可能性もあった。

そこで前稿ではヤウナリと並んで「ヤウアリ」をその調査の対象にした。本稿でも『今昔物語集』のヤウナリとヤウアリを調査した報告を行う。

前稿では、ヤウナリの上に在る語が形容詞か否かによってかなりその意味に違いが出た。したがって、ヤウナリを眼前の事態の状態を異次元の事態の状態を以て比喩的に描く「比況タイプ」と、形容詞に下接し意味を和らげているようにみえる「臙化タイプ」、動詞に下接するが形容詞の臙化タイプに近いと思われる「様子タイプ」にわけてみた。

本稿でもその分類を踏襲することを考えたが、『今昔物語集』ではかなり様相が変移しているので、まず形容詞に下接するタイプをあげ、次に動詞に下接するタイプ、名詞に下接するタイプとわけてその特徴を見て行くことにする。ヤウアリに関しても様相が変わっているがこれは一言で言えば固定化単純化の方向なので、ヤウアリで一括して述べることにした。

さて、『今昔物語集』のヤウに関して、漢字の読み方の問題がある。『今昔物語集』では本稿の調査対象となる「ヤウ」には、「様」と「様」の二つの字体が用いられているが、この二つには「ヤウ」という音読みと「サマ」という訓読みがある。旧大系の『今昔物語集』の校注者も、「様」は、一字の字音語の中では最もしばしば用いられ、半ば和語化しているようである」とした上で、ヤウかサマかという区別をつけたい場合が多いことが指摘してい

る。慎重を期さねばならない問題であるが、本稿では、基本的には旧大系のフリガナに従って用例を分類した。この中でヤウナリと読める例で一一例がフリガナないものであったが、他の用例などから類推してヤウナリの例に含めた。

本稿の資料には国文学資料館のデータベースを使用した。また、以下の注釈書を参照した。

山田孝雄・山田忠雄・山田秀雄・山田俊雄校注『日本古典文学大系』『今昔物語集』一～五』岩波書店 一九五九年～一九六三年

今野達『今昔物語集』一』岩波書店一九九九年・池上洵一校注『今昔物語集』三』岩波書店一九九三年・小峰和明校注『今昔物語集』四岩波書店』一九九四年・森正人校注『今昔物語集』五』岩波書店一九九六年

馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注『新編日本古典文学全集』今昔物語集③・④』小学館二〇〇一年・二〇〇二年

## 二 『今昔物語集』のヤウの全体像

一に述べたように、今昔物語集の「様、様」の訓には決めがたい点もあるが、基本的には旧大系本の訓に従った。その方針で用例数を見ると、「様、様」が用いられた文例は、『今昔物語集』には一七〇〇ほどある。この中で、「さま」と読むべきものが五〇〇例強である。したがって、ヤウと読むべきものは一二〇〇例前後あることになる。これは、『源氏物語』の八五五例の一、五倍に近い量である。しかし内容はずいぶん変化している。左に挙げた表は、修飾部を伴って用いられたヤウの分布である。形式的な意味のヤウの分布を見るための表であるが、中には修飾部を持ちながらも、実質的な意味を持つ用例も含まれる。

表一・『源氏物語』と『今昔物語集』のヤウの分布の比較

	総数	引用予告	連用修飾	連用中止	ヤウノ	目的語	ヤウナリ	ヤウアリ	その他
源氏	八五五	一〇	三七三	一〇一	一〇	一六	二〇四	一三三	八
今昔	一一八三	二五八	四二二	八七	五二	三四	一四七	一六三	二〇

## 引用予告

まず引用予告のヤウの増加が著しい。『源氏物語』では、

・ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば、大納言の家にまかりとまらむとするに、この人言ふやう、「今宵人待つらむ宿なむ、あやしく心苦しき」とて（帚木）

のような引用を予告する例は、一〇例に満たなかったが、『今昔物語集』では

・妻ニ語ヒケル様、「世ニ有ラム限ハ、此テ諸共ニコソハ思ツルニ、何ニ」ト云ケレバ（巻第三十第五）  
 ・心ノ内ニ思ケル様、「我レ年来大菩薩ヲ憑ミ奉テ、ト」ト思テ、（巻第三十一第一）

・其ノ札ニ書タル様、「此ハ翁ノ物見ムズル所也、人不可立ズ」ト。（巻第三十一第六）

二五八例も見られ引用を示す形式の代表となっている。これは、ヤウの用法の大きな変化と言える。

## 連用修飾のヤウニ

「ヤウニ」が連用修飾するものは、『源氏物語』では、三七三例で『今昔物語集』では四二二例あった。これは大体同じような比率であろう。動詞＋ヤウニ、形容詞＋ヤウニ、名詞＋ノ＋ヤウニの比率もあまり変化はないようだ。

ヤウノ

ヤウノの形の連体修飾は、『源氏物語』が一〇例、『今昔物語集』が五二例とこれも大きく増えている。これは、然レバ、自然ラ便宜有テ可助カラム事有ラム時ハ、此様ノ獸ヲバ必ず可助キ也。(卷第二十七第四十) のような「かくやう、さやう」が増加したためである。

### 目的語となるもの

動詞の目的語となる例は、『源氏物語』では、

・ 僧都の御文見れば、今朝、ここに、大将殿のものしたまひて、御ありさま尋ね問ひたまふに、はじめよりありしやうくはしく聞こえはべりぬ。(夢浮橋)

など、「言う、聞く」などの動詞の目的語になるものが数例あり、連体修飾部を持たない、つまり形式名詞とは言えないヤウが、「やう変ふ」の類で用いられるくらいであった。これが、『今昔物語集』では、

- ・ 宮守、見付タリシ様ヲ陳プト云ヘドモ、國王更ニ不用給ズ。(卷第五第十六)
- ・ 暫ク任セテ彼レガ為ム様ヲ可見シト。(卷第五第十八)
- ・ 其二、常ニ見ル人ニハ不似ヌ様シタル者ノ、機ヲ数立テ布ヲ織ル、亦、不知ヌ翁有テ牛ヲ牽ヘテ立テリ。(第十四)

・ 終ニハ思ヒニ成テ可為キ様モ不思議リケレバ、其ノ詩ノ和シテ、其レモ柿ノ葉ニ書テ、其ノ河ノ水上ニ行テ流シケレバ、宮ノ内ニ流レ入ニケリ。(第十第八)

・ 只、為ム様ヲ見テコソハ首ヲモ斬ラメト思テ見ル程ニ(第十第卅一)

三四例とずいぶん増加しているし、バリエーションも増えている。ただし、目的語となる「様、様」は「さま」と訓むべきか「やう」と訓むべきか迷う例もあるので単純にこの用法が増加したとはいえない。

## ヤウナリ

さて、本稿の主な目的であるヤウナリとヤウアリであるが、まずヤウナリの方は、『源氏物語』の総数が、二〇四例であり、『今昔物語集』が一四七例である。ヤウ全体が増加していることを考えれば、ヤウナリは減少気味である。後述するように『今昔物語集』では動詞ヤウナリと形容詞ヤウナリが数を減らして、名詞ヤウナリが数を増やしている。また終止法にたつもの（ヤウナリ）あるいは「ヤウニ十助詞十あり・はべり・おはず」で主文述語を構成する例）は、『源氏物語』では、六九例あったものが『今昔物語集』では二八例に減少している。したがって、この形も衰退している。だがしかし、一方で、名詞に下接したヤウナリは『源氏物語』では、一六例しかなかったのだが、『今昔物語集』では、五九例と増加している。そこで、本稿では、この名詞アウナリも観察の対象とする。

## ヤウアリ

ヤウアリに関しては、『源氏物語』九五例であった。（注二）終止法にたつものが六四例あった。『今昔物語集』が一二六例であり、このうち終止法にたつものは、六一例でこちらも減少している。ただし、

・「此ハ様有ル事ナラム」ト思テ返ヌ。（巻第十九第四十四）

のような連体修飾部のない「やう」を主語とするものは三三例と増加している。

このようなヤウという語の分布も『今昔物語集』と『源氏物語』とでは異なる点が多い。文体の差もあろうが、時代的な変遷の要素の方が強いと思われる。

## 三 『今昔物語集』のヤウナリ

## 三の一 形容詞に下接するヤウナリ

形容詞にヤウナリについては、『源氏物語』では「醜化タイプ」という分類項目を立てた。これは前稿で「単なる形容詞述語に比較して、このヤウが添加された形は、上の形容詞の意味を和らげたような印象がある」としたものである。『源氏物語』では形容詞がヤウを修飾する形はたくさんあるが、ヤウを主文主語とし、形容詞が主文述語であるものは、わずか一例のみであった。似た意味の「サマ」については、形容詞がサマを修飾する場合も、サマが主語で形容詞が述語であるものと同じくらいの用例数があるのに、ヤウナリではこのような偏りが見られる。そこで、形容詞に下接するヤウナリは、接尾語的なものではなかったかと考えたのである。

『今昔物語集』では、様相が大きく異なっている。まず、ヤウナリに限らず、ヤウを形容詞が修飾する用例が少なくなっている。『源氏物語』では、形容詞が連体修飾している例は、一五三例あった。この中で、「無し」(四〇例) ただし「すべなし」「ものげなし」など複合したものも含む) や「同じ」(二三例) は他と比べれば用例数が多いのだが、他の形容詞も他種類用いられていて、この醜化タイプタイプが活発であったことを示している。これに対して『今昔物語集』では全用例数が八七例と半分近くに減っている。ヤウの用例自体は『今昔物語集』の方が多いのだから、大きく減少したと言わねばならない。

そして、その用例の三分の二近くを

・ 第一ノ鉢ニ飯ヲ皆投入テ見ニ、桶ニ飯同様ニ有リ。(巻第四第十五)

・ 「此ノ人此ク微妙ク可咲クトモ、筥ニ為人(シイレ)ラム物ハ、我等ト同様ニコソ有ラメ。(巻第三十第二) のような「同じ」(五一例) が占めている。この「同ジヤウ」に関しては、一語化して一つの形容動詞になっているとも考えられる。

これ以外には、

・ 然リ氣无<sup>ナ</sup>キ様ニテ前ニ遣テ、夜ニ成テ(巻第二十九第六)

・此ノ小男ハ然ル氣无キ様ニテ出来タレバ（卷第二十九第七）  
 のような「サル（サリ）氣ナキヤウナリ」七例を含む「無し」（一一例）がある。これも固定化が進んでいる。残りヤウニの形式で、

・正家ニ、此ノ事ヲ不吉又様ニ聞セツ。（卷第十三第卅八）

・御前モ然思食タル也」ト云ヘバ、夫、「吉様ニ申セ」トイヘバ（卷第二十六第五）

・只何カニモ吉カラム様ニ成リ給ヘ」ト云ケレバ（卷第三十第四）

「良し」（「良からむ、良からぬ」を含めて九例）の用例がある。『源氏物語』の段階では、形容詞に下接したヤウは接尾語的なものとも考えられた。しかし、そのありようは、さまざまな形容詞に下接することが出来るある意味で文法的なものであったが、『今昔物語集』の例では、「同じ」「さる（り）氣なし」「よし」など少数の形容詞に下接するのみで、相当に固定化が進んでいるということだ。

さて、上記固定化したと考えられるものを除くと、ヤウナリが形容詞に下接するものは、

・其レニ、如此クノ文造テ世ニ弘ムル事ハ、只今ハ賢キ様ナレドモ、後ノ世ニハ露計モ益ヲ得ル事无ケレバ（卷第四第十一）

・一人ハ年老タル尼也、一人ハ若キ女ノ極テ瘦セ枯テ色青ミ影ノ様ナル、賤シキ様ナル筵ノ破ヲ敷テ其レニ臥シタリ。（卷第十九第五）

・兼時・敦行各坏ヲ取テ泛許受テ吞ニ、酒少シ濁テ酸キ様ナレドモ、日ニ被炮テ喉シ乾ニケレバ、只吞ニ吞ル。（卷第二十八第五）

・男、聞クニ、思ヒニ違テ、少シ心月无キ様也。（卷第三十第十一）

の四例のみになる。この中で、（卷第四第十一）、（卷第十九第五）、（卷第二十八第五）の用例は、「賢明であるよう

だが、「賤しい様子の」、「酸っぱいようだが」のように、『源氏物語』に多く見られた醜化タイプの例と考えられるだろう。しかし、(巻第三十第十一)の例は、妻に物を送ったのだが、「そんなものは知らない」と言われた男の状況を示すのに用いられていて「少し気にくわない」という男の心情を外部から観察して述べているもので、現代のヨウダの概言の用法に近いものだと考えられる。このような現代語のヨウダに近いものは次に述べる動詞に下接する例や名詞に下接する例にも見られ、注目すべきものである。

### 三の二 動詞に下接するタイプ

ヤウナリが動詞に下接するものは、三七例あった。以下は、用法にわけて見ていくが、用例数の多いものは終止法の用例のみ示した。

#### 三の二の一 比況タイプ

比況タイプは全部で二二例ある。『源氏物語』ではヤウナリの代表的な用法であり、『今昔物語集』にも用例が多い。

##### 第三

・廁ニ行キタル間ダ、隣ノ房ニ有ケル法師ノ聞ケレバ、廁ニ居タルケル音ハ椽ノ水ヲ沃<sup>イコホ</sup>泛<sup>ヤウ</sup>ス様也。(巻第十九)

##### 第四(五)

・云ニ随<sup>ツ</sup>テ、廊ノ有ル遺戸ヲ引開タレバ、大キナム人ノ黒ミ脹<sup>ヤウ</sup>臭タル臥セリ、臭キ事鼻ニ入<sup>ヤウ</sup>様也。(巻第二十四第二十二)

・人ノ、鹿ナドヲ下シテ食ムズル様也。(巻第二十六第七)

・冠ハ落ニケレバ、髻露<sup>ナ</sup>无<sup>シ</sup>、瓮<sup>ホト</sup>ヲ被<sup>ヤウ</sup>タル様也。(巻第二十八第六)

・衣ノ重ナリ・色共可云盡クモ非ズ、光ヲ放ツ様也。(卷第二十一第五)

・香ハ口・鼻ニ入ル様ニテ无限ク臭カリケレバ、嘔スル様ニナム有ケル。(卷第十九第十)

これら以外に連体修飾や条件節の内部にある用例が一四例ある。連体修飾の例では

・其ノ谷ノ東ノ岸ニ壁ヲ塗タル様ナル高キ石有リ。(卷第三第八)

・堀川ノ中将、欄姿ニテ、型ハ光ル様ナル人ノ愛敬ハ泛ニ泛テ、艶ズ醜クテ参リ給ヘリ。(卷第二十八第二十

一)

のように、ヤウナリがモノ名詞を連体修飾している例が多く見られるのである。『源氏物語』では、このような場合には、

・もの語りに、ことさらに作りいでたるやうなる御ありさまなり。(『源氏物語』賢木)

・おぼえず神仏のあらはれたまへらむやうなりし御心ばへに。(『源氏物語』蓬生)

のようにヤウナリが連体修飾するのは、コト名詞である場合が多い。

ヤウナリ構文について、上の連体修飾部がヤウを修飾して、「スルヤウ」という形式名詞句が構成されそれが述語となっていると考えれば、主語は事態を表すヤウの名詞述語句に対応して、コト名詞でなくてはならない。もしモノ主語が主文主語の位置にあれば、そこには、コト名詞述語が打ち合うという「ねじれ」の関係が生じていることなる。

一方、ヤウナリが上接の用言に接尾語的に付加する形式用言と考えるならば、「上接用言+ヤウナリ」が一つの用言相当になり、主語はモノにであつても、通常の主従関係を構成することになる。

前項では、この比況の場合にはヤウを形式名詞とみて、名詞述語文とする見方と、ヤウナリを形式用言相当のものとして、形容動詞述語文とする見方とどちらも成り立つと述べた。

これは、『源氏物語』のヤウナリには、まさに形式用言とよぶべき臚化タイプが豊富にあることに支えられた上  
のことであつた。

『今昔物語集』では、臚化タイプは衰退し固定化していた。そのことからすると、『今昔物語集』のヤウナリを  
形式用言であるとは考えにくい。すると、ここにあげたヤウナリがモノ名詞を連体修飾する例は、「壁ヲ塗タル様  
ナル高キ石」の例ならば、「高キ石、壁ヲ塗タル様ナリ」というように主語述語がねじれの関係にあることになる。  
事実、条件節内部にヤウナリが用いられた例には、

・其ノ戸ハ閉タル様ナレドモ、押セバ開也。(巻巻第二十九第三)

のように明確にモノ名詞を主語とする用例もある。このような例はまだ少数なのだが、連体修飾するヤウナリがモ  
ノ主語を修飾するということは、このようなねじれの関係を潜在させていることを意味している。

比況の用法は、『源氏物語』と『今昔物語集』で一貫しているものであるが、連体修飾するヤウナリ的情況を見  
ると、新屋(一九八九)のいう現代語の形式名詞文に一步近づいているのである。

### 三の二の二 様子タイプ

「様子」は動詞述語ではあるが状態を表すものに、ヤウナリが下接し、結果として、臚化タイプと同様に、意味  
を和らげたものである。これは、『源氏物語』でも用例は多くなかったが『今昔物語集』では、わずか三例である。

・悪キ事ヲバ、當時ハ心ニ叶フ様ナレドモ、終ニハ悪キ事也。(第十第十五)

・此ノ阿闍梨ノ書タルハ、筆墓无ク立タル様ナレドモ、只一筆ニ書タルニ、心地ノ艶ズ見ユルハ、可咲キ事无

限シ。(巻第二十八第卅六)

・己レハ誰ソ。恠ク具シ参ラセタル様ナルハ」ト云ヘバ、童打咲テ、(巻第三十第六)

これらは、動詞述語であるが「心ニ叶フ」「筆墓无ク立タル」「恠ク具シ參ラセタル」というように状態を表しており、ヤウナリによって形容動詞化されていると見られるものである。

### 三の二の三 概言と思われる用例

『源氏物語』の様子タイプについては臚化タイプと同じく、事態をばかして表現はしているものの、話者にとって事態の存在は明確に意識されたものであり、事態の存在自体について判断をばかしてはいるわけではないのである」とした。

しかしながら、『今昔物語集』で動詞にヤウナリが下接したものには、話者にとって存在が不明確な事態を表現していると考えられる例もある。たとえば、

・我レニモ非ズ人ノ落シ置タル氣色ニテ、橋ノ高欄ニ押懸テ居タルガ、人ヲ見テ、耻カシ氣ナル物カラ、喜ト思ヘル様也。(卷第二十七第十三)

これは、ある男が鬼が出るという噂の橋を渡ろうとしたところ、橋の上に美しげな女性を見かけた場面で、その女が「人を見て恥ずかしそうにしながらもうれしく思っている様子をしている」ことを述べている部分である。語り手の視点は男の方にあるわけで、その視点からは、その女性の本当の様子は分からない。したがって、「喜ト思ヘル」というのは、比況でも判断をばかしているわけでもなく、不確定な判断を下しているのである。もう一つ例を挙げる。

・怪ビ思テ、此音ヲ聞バ、上ニハ非デ、物ニ籠タル様ニテ、土ノ底ニ聞ユル様也。(卷第二十六第五)

この用例は、どこかからうめき声が聞えてきて、その出所を探しているところである。そのような文脈で「土の中から聞える」ということに表現して言うのだから、比況ではありえない。また、事態をばかして表現はしているとい

うことにも当たらない。これなども現代語のヨウダと同様の積極的な概言の表現とすべきであろう。あと一例、

・ 弥ヨ仏ヲ念ジ奉ニ、洩リ入ルルニ、嘗ツル様也。ヤウ（巻第二十六第五）

これは、氣を失った子供を介抱する場面で、衣服に浸ませた水を絞って飲ませたところははじめは、水はこぼれ出るようにであったが、後になめるようにするという部分である。「なめる」というのが不確定な判断か比況か微妙な表現である。

このように、『今昔物語集』では、『源氏物語』にはほとんど見られなかった現代語のヨウダの概言表現にきわめて近いものも存在するのである。

この現代語ヨウダに似た例については、非終止用法のものも存在する。

・ 火ヲ打振ツ、麻柱ノ上様ヲ見ル程ニ、磨柱ノ中ニツメラレテ、否不動様ナル男有リ。（巻第二十三第廿）

これは、強力の僧正に蹴飛ばされた男が麻柱（足場）の間に落ち挟まって身動きできないところを述べた文であるが、視点はその男を捜している者たちの立場から描かれており、その視点からは、男の状態は確実には分からないが、視点が、このヤウナリも現代語の概言に近い用法である。さらにまた、

・ 其レヲバ静ニ思ヒ、今ノ妻ハ京ヨリ迎ヘタル者ニテナム有ケル、其レヲバ思ヒ増タル様也ケレバ、本ノ妻心  
疎シト思テゾ過ケル。（巻第三十第十二）

これは、夫の心情を描いている部分で、観察するだけでは確実には把握できない他者の心理に用いられているから概言的な用法である。

このように、動詞にヤウが下接した例については、終止法に用いられた例は少ないながらも、『源氏物語』の用例から一步現代の概言的な用法に近づいたものがあるのである。

ただし、これらも、ヤウの連体修飾部内部の主語が、主文主語に昇格した例、つまり、コト名詞述語句のヤウナ

リに対して、モノが主語主題にたった例は無かった。

### 三の三 「名詞十ノヤウナリ」に下接するタイプ

前稿では、このタイプを取り上げなかったので、まず『源氏物語』の「名詞十ノヤウナリ」を見ておく。

『源氏物語』にはこのような例は、五五例あった。この内、

- ・ いみじと言ふにも、飽かず夢のやうにて、誰も誰もまどひはべるよしを申させたまへ。(蜻蛉)
- ・ あさましきこともありし身なれば、いとうとまし、すべて朽ち木などのやうにて、人に見捨てられてやみなむ、とめてなしたまふ。(手習)

・ 結びとどめたまへよ」など、いと弱げに、骸のやうなるさまして泣きみ笑ひみ語らひたまふ。(柏木)

のような比況の例が三三例あった。この中の一五例が「夢のやう」の用例である。また、

- ・ しこくも古りたまへるかなと思へど、うちかしこまりて、「院隠れたまひて後は、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず。(朝顔)

・ 昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人のうちにはかぞへたまひけり。(関屋)

のような同一同様を表すものが一五例とこの二つのタイプで用例の大半を占めている。他には形容詞の離化タイプに近い例が、

- ・ 君おぼしまはずに、夢うつつさまさま静かならず、さとしのやうなることどもを、来しかたゆく末おぼしあはせて、世の人の聞き伝へむ後のそしりもやすからざるべきをばばかりて(明石)

・ 姫宮の御ことの後は、なにごとも、いと過ぎぬるかたのやうにはあらず、少し隔つる心そひて、見知らぬやうにておはす。(若菜上)

・ ゆゆしきついでのやうにはべれど、かみもしもも、かかる筋のことは、おぼし乱るるはいとあしきわざなり。(柏木)

が六例あった。

比況や同一同様を示す例が多いのは、『源氏物語』の動詞・形容詞に下接した例の双方に似た状況である。

これに対して、『今昔物語集』ではほぼ同数の五九例の用例があった。これらの中では

・ 此玄象ハ生タル者ノ様ニゾ有ル。(巻第二十四第二十四)

・ 色ハ緑青ノ色ニテ、目ハ琥珀ノ様也。(巻第二十七第十三)

・ 此ハ皆極樂・天上ノ様也。(巻第二十八第七)

のような比況の例が四五例とそのほとんどを占めている。しかしながら、次のような例は注目すべきである。

・ 然レバ、木ノ端ヲ以テ指スニ金ノ様也。(巻第十六第二十九)

・ 見レバ、隔様シテ、僧房ノ様也。(巻第十九第十九)

一つ目の(巻第十六第二十九)の例は、死人があまりに重いので、木でついでみると金属のような手応えがあった、という部分である。感覚を証拠とする概言の表現で実に現代語のヨウダに似た表現である。また二番目の(巻第十九第十九)は、山で迷った僧が見知らぬ建物に出会った場面である。したがって、これも「部屋を区切ってあって僧坊らしい」という概言の用法である。

終止法に用いられたものは、この二例だが、他にも、

・ 済海ニ入タルニ、水腰ノ程ニシテ、足ニ石ノ様ナル物ヲ踏ヘラレタリ。(巻第十九第三十)

・ 「何ノ料ニカ有ム」ト思フ程ニ、下衆男ノ、木ノ様ナル物ヲ一筋打置テ去ヌ。(巻第二十六第十七)

・ 亦近江ニ知ケル所ヲモ偏ニ我が領ニシテゾ樂クテ過ケル程ニ、生夕暮ニ糸清氣ナル紙ニ申文ノ様ナル物ヲ、

人ヒト持来テ差置テ去ヌルヲ（巻第二十九第四）

のような例がある。（巻第十九第三十）の例は、海賊に海に放り出された男が、固いもの（実は大亀の甲羅）を踏んだという場面でそれを「岩のようなもの」と推測しているのである。また、（巻第二十六第十七）は、「何ノ料ニカ有ム」という課題意識のもとに「木ノ様ナル物」としてるところから、不確かな解答案を概言の形で述べていると考えられるのである。（巻第二十九第四）も何かはわからないが、上申書に見えるものという概言的な用法である。

このように、「名詞十のヤウナリ」は、比況とは呼べない概言的な用法のものが数例あるのである。

### 三の四 ヤウナリのまとめ

以上のように『今昔物語集』のヤウナリは、『源氏物語』のヤウナリとは大きく様相を異にしていた。『源氏物語』のヤウナリは、比況や形容詞下接の臚化タイプが主な用法であった。比況の用法については、ヤウナリが形式用言と考えることもできた。臚化タイプも形容詞に下接する接尾語的な用法と考えれば、『源氏物語』のヤウナリは、述語に立つべき用言の属性を変容させることに働いていたということになる。若干存在した動詞に下接しながら比況の意味にならない様子タイプのものをこれに準じて考えられる。

一方、『今昔物語集』のヤウナリは、臚化タイプが衰退し、ほとんどが比況タイプになっていた。しかしながら、少数、現代語の概言のヨウダと同様に、語り手には不確実な事態について推定して述べるという用法も出現していた。

### 四 ヤウナリについて

『源氏物語』のヤウアリには、

・寝殿のかたに、人のけはひ聞くやうもやおぼして、やをらたちのきたまふ。(末摘花)

・「大日如来そらごとしたまはずは、などてか、かくなにがしが心をいたしてつかうまつる御修法、験なきやうはあらむ。(夕霧)

・ありへて後や、さるべき御宿世、のがれきこえたまはぬやうもあらむ。(若紫)

・もどききこゆるやうもありなむかし。(賢木)

のように上接項目が多種多様であった。右の例でも動詞連体形、形容詞、助動詞ズと様々である。その用法も、(末摘花)の用例は「かもしれない」という概言的な意味合いで用いられ、(夕霧)は、「やうあらむ」という反語で「験あり」が必然であることを意味し、(若紫)(賢木)は可能性を示すなど多様であった。『源氏物語』のヤウアリ構文は、連体修飾部の事態を「一般的に可能性がある事態」として表現するものが多い。また、連体修飾部の主語であるべきものが主文の主語・主題に昇格していることがあり、「ねじれ」の関係が見られるものがあり、この点でも、ヤウナリよりも文末名詞文に近い存在といえた。

『今昔物語集』では、ヤウアリについては固定化が著しい。一二六例中九七例が、

・女子ノ云ク、「今ハ可為様ナシ」(卷第二十六第十)

・其ノ井深クシテ可登キ様无クテ、(卷第五第廿一)

・我レ、此ノ事ヲ可報申キ様无シ。(第十第十四)

のような「べきやうなし」の例である。このような用例は、『源氏物語』にも、

・あらし、などあらがふべきやうもなし。(夢浮橋)

のようにあるにはあるのだが、二例のみで決して優勢な形式ではなかった。

「しベキヤウナシ」以外には、

・龜ノ頸ハ四五寸ト指出ヅル物ヲ、口ヲ指寄セテ吸ハムトセムニハ、當ニ不被<sup>クハレ</sup>昨<sup>ヤ</sup>又<sup>ヤ</sup>様ハ有ナムヤ。(卷第二十  
八第卅三)

・何デカ不奉<sup>ヤ</sup>又<sup>ヤ</sup>様ハ侍<sup>ヤ</sup>ラム」ト云テ、鷹ヲ与ヘムト為ルニ(卷第二十九第卅四)

のような「しぬヤウありなむや」のような反語の形式で結果としては必然を主張するものが九例と、不可能必然を表すものでほとんどを占めている。さらに一一例は、

・「思給<sup>ヤ</sup>フ様ゾ有ラム。(卷第十二第卅三)

・然レバ茸<sup>ヤ</sup>ヲ食テ醉テ忽ニ死ヌル人モ有リ、亦此ク不死ヌ人モ有レバ、定メテ食<sup>ヤ</sup>フ様ノ有ルニコソハ有ラメト  
ナム語り傳ヘタルト也。(卷第二十八第十七)

などの「わけ、方法」など実質的な意味を表すものであった。『源氏物語』で優勢であった可能性を示す用例は、

・可勝<sup>ヤ</sup>キ様モ有ラム、只、勝負<sup>ヤ</sup>定メ无<sup>ヤ</sup>キ事也」ト。(卷第十六第十八)

・獵師ノ思ハク、「然<sup>ヤ</sup>バ我モ見奉<sup>ヤ</sup>ル様モ有ナム」ト思テ、獵師、聖人ノ後<sup>レ</sup>ニ不寝<sup>ヤ</sup>ズシテ居タリ。(卷第二十第十  
三)

などの四例に激減してしまっている。

さて、この「しベキヤウナシ」であるが、その一部分の主語の形式は多様である。主語が明示されている用例は  
二〇例ほどで、その半数の一一例は、

・然レバ此ノ児更<sup>ヤ</sup>ニ可生<sup>ヤ</sup>長<sup>ヤ</sup>キ様无<sup>ヤ</sup>シ。(卷第五第十七)

・我レ、此ノ事ヲ可報<sup>ヤ</sup>申<sup>ヤ</sup>キ様无<sup>ヤ</sup>シ。(卷第十第十四)

のように無助詞の主語である。ハがついたものは、

・但シ、此身ハ命長シト云ヘドモ遂ニ不死ヌ様无シ。(卷第四第四十)

・然レバ、此様ノ者祭タル者ハ、靈驗掲焉ナル様ナレドモ、遂ニハ不被現ヌ様无シ。(卷第二十第四)

・此レガ出立ナバ、主計・主税ノ頭・助ニモ大夫ノ史ニモ、異人ハ更ニ可競キ様无ナメリ。(卷第二十四第十八)

など三例あった。反対に、主語がガノで示されてヤウの連体修飾部の中に収まってしまふような、

・實ノ佛ノ此ク俄ニ木ノ末ニ可出給キ様无シ。(卷第二十第三)

・彼ノ童ノ、火、難ヲバ離ヌレドモ、遂ニ可生キ様无シ。(卷第二十六第三)

の用例は二例のみであり、ヤウナシの文末名詞文化が進んでいることを示唆している。

このように『源氏物語』の「ヤウアリヤウナシ」は、概言に近いものから不可能に近いものまで、表現性に広がりがあり、文末名詞文として多様性を誇っていたが、『今昔物語集』では、もっぱらベシを伴って不可能を表すものに変化したようだ。

### 五まとめ

『源氏物語』のヤウナリ・ヤウアリと比較すると、『今昔物語集』のヤウナリは接尾語ないしは形式用言としての性格が薄れていることに気づく。さらにまた、ヤウアリについては、「べキヤウナシ」という一つの形式に固定しつつあることがわかる。

ヤウナリには不確実な事態についての推定を述べるとしか考えられない例がいくつか出現している。『源氏物語』においても「様子タイプ」とした中には、それとおぼしきものもあったのだが、『今昔物語集』では用例数も増えている。『源氏物語』のヤウナリに対して、『今昔物語集』のヤウナリが名詞に接続する用例のバリエーションが増えていることは注目すべきであろう。

近現代でヨウタに近い意味で用いられているラシイも近世には、名詞について推量を表すに用いられることはあったが、用言に下接することは無かった。これが、明治四〇年前後の夏目漱石の作品にはラシイが用言に付いた例が盛んに出てくる。これは、現代の若者言葉「雨が止んだっばい」のようなポイにも言えることで、昭和にポイが名詞について、「あの車、なんだか外車っばいね」などの推定を表す表現が許容されるようになり、ついで、平成に入って、右のような形が用いられ出したのである。したがって、『今昔物語集』のヤウナリの概念的な用法もまずは、名詞に下接したのから出てきたと考えられるのである。

### 注

注一 以下この語は、新屋の定義にしたがって用いる。

注二 前稿の八四例は誤記である。ここに訂正する。

### 参考文献

- 松村明（一九七五）「近代の文法—江戸語から東京語へ」（『日本文法講座 3 文法史』明治書院）
- 寺村秀夫（一九七五）「連体修飾のシンタクスと意味 その一」（『日本語・日本文化』四号 大阪外国語大学留學生別科、一九七五年八月）
- 寺村秀夫論文集 I 日本語文法編「くろしお出版 一九九三年所収」
- 寺村秀夫（一九七七a）「連体修飾のシンタクスと意味 その二」（『日本語・日本文化』五号 大阪外国語大学留學生別科、一九七七年三月）
- 寺村秀夫論文集 I 日本語文法編「くろしお出版 一九九三年所収」
- 寺村秀夫（一九七七b）「連体修飾のシンタクスと意味 その三」（『日本語・日本文化』四・五・六号 大阪外国語大学留學生別科一九七七年九月、寺村秀夫論文集 I 日本語文法編「くろしお出版 一九九三年所収」

佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』明治書院 一九八三年

新屋映子(一九八九)「文末名詞文について」『国語学』一五九号 一九八九年

宮地朝子(二〇〇〇)「特集 日本語の最前線 形式名詞に関わる文法的展開—連体と連用の境界として」『国文学

解釈と教材の研究』五〇巻五号 二〇〇〇年五月

山口堯二(二〇〇三)『助動詞史を探る』第八章「やうなり>やうだ」の通時的変化』和泉書院、二〇〇三年九月

小島聡子(二〇〇三)「接尾語「ばい」の変化」『明海日本語 八号』(明海大学)二〇〇三年

近藤要司(二〇〇六)「『源氏物語』のヤウナリとヤウアリ」『親和国文』四一号